

て後澄清し、細絹にて濾て、直に用ふべし、必温るにおよばず、これを一外科には、秘傳の水薬といひて稱用しが、近來喁蘭醫の單の水を用ると聽て、それに效ことになりぬ、これ予が思ふ旨と符合せることにて、石灰の水薬に比ては、水を用るかた、大に利ることあるなれども、俗人は、金創を水にて洗といはば、必訝ていはん、洗ところの水が、創口より入て、破傷風にならんかと、これ決してなき理なれども、醫士にも、乏か謬慮する輩のなきにあらねば、その嫌疑を懼るものは、この水薬を用ふべし、たゞかの火酒を用ひて、金創を洗て、空に患者を苦痛せしめ、且後害を爲こと多に比ては、其功尤優ることなり、故にその弊を救んが爲に、これらの説にも及べるなり、水療俗辨の中にも、此事を論じたれば、宜併考べし、さて深き創處は、小兒の玩具に用る竹にて造たる唧筒などを用て、創口へ彈射て、洗も可、外科には、すばいと、いひて、鍮銅にて製たる筒を用、これその洩血を、微も中に遺ときには、必膿潰ざれば、愈ることなきが故に、愼で之を洗去ることなり、もしかかる器もなきときには、よく其創唇を左右へ開て、旁人をして、土罐にて灌て、洗もまたよし、預白き棉布を、創の大きさより、四五分許も長く裁て、それを、鷄子白に蘸おきて、さてよく洗たる後に、創唇を、婦女子の衣裳の破裂を緝欄るやうに、心を定て、微も參差なく、齟齬ぬやうに窄合て、ありあふ、椰子油、猪脂、または麻油やうの物を、唇口へのみ塗て、その兩方へ、この鷄子白に蘸たる布を亘て、その上より、またぐ、木綿を摺て、水と醋を等分に合たるに、打濕て、創上に壓定、さて縛綿を施なり、木綿を縛には、始終創唇の齟齬ぬやうに、緊からず、緩からぬやうに、木綿の無益に重疊ぬやうに、徐々と微も浮氣ことなく、心を臍下に在て、靜に縛了べし。

〔渡邊幸庵對話〕一昔血留など、申事稀也、血止草などを用ひて事濟けるが、秋は手疵負たるには、澀柿を嚙くだきて付たるがよし、血止となり、痛を去りて、早く疵を愈しける、今はいろく、薬あり、然ども昔の澀柿の功、程成を不見、澀柿は側にありても、血不止と云説あり、勘辨すべし。